

バレエダンサーという職業

4月から7月までの3ヶ月間、シンガポールダンスシアター(SDT)でも、スタジオが閉鎖された為、ダンサー達は自宅待機となりました。限られたスペースで練習を続け、世界のダンサー達とSNSを使って繋がる様子に、自分の好きな事、出来る事を職業にしている人達の強さや明るさがありました。幼い頃の夢を叶えた人達、バレエダンサーとはどんな人達なのでしょう。

プロになる道のりは千差万別ですが、子供時代の週に1度のお稽古から、中級、上級と進み「ほとんどプロ」のレベルに達した人が、バレエ団のオーディションを受ける時、それぞれの道のりはクロスします。興味深い事に、ほとんど全てのダンサーがバレエ人生において「あなたはプロになれない」と言われる瞬間があるそうです。それは本人には挫けそうになる瞬間ですが、バレエの世界が“踊りたいダンサー(a dancer who wants to dance)”と“踊らなくてはいけないダンサー(a dancer who has to dance)”をふるいにかける瞬間でもある、と芸術監督のヤネックに聞いたことがあります。舞踊界に必要なのは後者です。実力だけでなく、幸運と不退転の決意がダンサーをプロの世界へ導き、完全な美を追求し、日々の努力を続ける意志がその後のキャリアの扉を開いていきます。



オデットの峯岸伽奈さんを囲んで終演後の記念写真
(2019年「白鳥の湖」)

芸術監督のオフィスには毎日オーディションを希望するメールが届きます。それでも現在所属するのは日本人13名を含め39名のみ。厳しい競争を勝ち抜いたダンサーの日常とはどんなものでしょう。



Master Piece in Motionの舞台裏(2019年「FIVE」)

ヤング靖子

SDTのダンサーは1年のうち52週雇用され、お給料、保険、休暇等、他の業種と同じようにカンパニーと契約を結びます。少し違うのは支給されるトゥシューズ(ポワント)も含まれる点でしょうか。

典型的なスケジュールは、平日は午前中に1時間半のカンパニーレッスン、休憩を挟んで午後5時半までリハーサル。午後は、一つの演目の細部まで拘る集中的なリハーサルの時もあれば、4～6の異なるバレエのリハーサルの時もあります。クラシックを1時間踊った後、次の1時間はコンテンポラリーを踊るためソフトシューズで、全く違う体の動きを試す日もあります。年間で見ると、6回の国内公演と海外公演が舞台数に換算して44ステージあり、加えて公開リハーサル、ショーアイング(Showing:スタジオでプライベートにご覧頂くバレエ)、学校での出張授業等の教育プログラムをこなしますので、フル・スケジュールの忙しさです。けれども、芸術を極める満足感、達成感は「時間にもお金にも換算出来ない、素晴らしいご褒美であり特権」と芸術監督は話します。



「眠れる森の美女」終演後、冬休みを前にリラックスした笑顔

練習を重ね、厳しいリハーサルをこなし、舞台でチームワークの極限に挑む、その経験に同じものは一つとしてありません。本番で美しい衣装を纏い、音楽を聴き、完璧を目指し何ヶ月も練習してきた作品を踊る瞬間は、ダンサーにとって、何にも代え難い経験と聞きます。バレエダンサーが「職業として貴人であるよう訓練された知的で洗練された“人種”(芸術監督談)」と云われる所以であり、こうした経験を通して、一人一人がプロフェッショナルとして、振付家、バレエマスター、同僚ダンサーに対して尊敬と信頼の気持ちを持って接する責任を学んでいきます。



マレーシア公演の舞台袖の様子(2019年「セレナーデ」)



オフの日はこんな撮影会を楽しむことも。チャンギ・ビーチにて
(峯岸伽奈さん、山内沙耶香さん、水野伶皇さん)

CB期間中、SDTでは毎週、頂いた質問にダンサー達が答えるインスタ・ライブを行いました*。お気に入りのカフェから舞台の失敗談までお喋りが続く中「ダンサーについて最大の誤解は?」という質問には異口同音に「ダンサーは少食、かな」と答えが。ひょっとすると「ダンサーはツンツンしている」という誤解もあるかもしれません。優美に踊る人達は近付き難いと思われる方、いらっしゃいませんか。答えは「いいえ」です。実際に会ってみると、運動神経の良さだけでなく、人格的にもバランスのとれた素敵なお人達です。バレエの見せ場の一つ、リフト(男性が女性を高く持ち上げる技)では、女性は100%パートナーを信頼し、男性は100%パートナーに責任を持って初めて成立すると芸術監督が説明してくれた時、ダン



子役の子供達にサインをする田中七瀬さん
(2020年「ロミオとジュリエット」)



最終リハーサルで監督の指示を聞く(2020年「ロミオとジュリエット」)

サーの親しみ易さや優しさの理由が分かった気がしました。バレエの美しさの秘密の一つかもしれませんね。

ダンサーとして活躍する年数は人によって違います。近年、技術や体力が向上し、一昔前に比べて長くなつたと言われますが、いつか舞台に別れを告げる日が訪れます。第2のキャリアは、写真家、教師、作家、俳優、デザイナーから弁護士などなど、多岐に及びます。天から与えられた才能は一つではないんですね。そして新しいキャリアで成功を収める人はとても多いと聞きます。なぜなら、「ダンサーという人種は、厳しい職業倫理を持ち、集中して取り組む姿勢を保ち、常にゴールを意識し、集団で助け合うことが出来るから(芸術監督談)」。

そして、涙や笑いを共有した仲間はバレエ団を離れた後も温かい友情を保ちます。日本人会でバレエを教えていらっしゃる杉田先生もその一人。是非、現役時代の思い出話を聞きになってみて下さい。

資料及び画像提供:Singapore Dance Theatre (One @ the Ballet)、田中七瀬、三浦丈明

*10月のSDTのインスタ・インタビュー“Meet Me On Monday”では、本連載に画像提供で参加しているダンサーの三浦丈明、峯岸伽奈夫妻の日本語インタビューを準備中です。ご質問があればSDTのインスタグラムからお送り下さい。日本語/英語大歓迎です。

プロフィール/近況:ヤング靖子

Singapore Dance Theatre, Ambassadors Council
私は日本語補習校のボランティアもしています。教室での授業が再開され、「読んでいますよ」とあちこちで声をかけて頂きました。ありがとうございます。この原稿をお渡しする頃、エスプラネードではCB後初の試験的な公演が行われます。劇場の「新しい日常」をご報告出来る日が近づいて来ました。



インスタグラム
singaporedancetheatre



100%の信頼が生む美しいリフト(2019年「Bitter Sweet」)